

## 近代日本彫刻考(二) 山都町の「大造り物」を中心に

芝山 昌也

The Consideration on Modern Japanese Sculpture (2) : On "Otsukurimono" in Yamato-cho

SHIBAYAMA Masaya

### はじめに

本稿は熊本県内の祭礼で制作される「造り物」について、文献調査と制作現場の視察を中心にした論述である。ここで扱う「造り物」は富山県高岡市あたりから九州全域までの西日本に多く見られたもので、熊本県は現在でも「造り物」の制作が盛んである。熊本県内の「造り物」の研究を通じて、地域性と造形の関係を探りながら、江戸時代、明治時代の立体造形が、どの様に現代の作り手に継承されているのかを検証する。

### 松本喜三郎の地蔵祭りと「造り物」の伝播

筆者は拙稿「近代日本彫刻考(一)『光雲懐古談』をめぐって」<sup>1)</sup>において、高村光太郎の言説を引きながら近代日本彫刻が如何に人形の類いを遠ざけたのかを述べた。そこで高村光雲が高く評価した江戸の生人形師・松本喜三郎のいくつかの作品について調査することになった。喜三郎が残した生人形を視察し、関係者に取材をするうちに、この強い個性をもった人形師を育んだ地域と地蔵祭りの「造り物」に興味を持ち、調査を行うことになった。

弘化元(一八四五)年ごろ、二〇歳前後の喜三郎が地元・熊本の地

蔵祭りの「造り物」競技で人形造りの腕を磨いていたことは、よく知られている。ごく近い地域には互いに腕を競った二歳年下の人形師・安本亀八<sup>2)</sup>がいた。この二人が制作した「造り物」に観衆が押し寄せていた様子など、当時の熱量については大木透の記した『名匠松本喜三郎』<sup>3)</sup>に詳しい。その後、江戸や大阪で生人形の評判をほしのままにする二人が隣町で腕を競ったことは、大木の記すように「まさに宿命」であった。その頃、喜三郎が地元の地蔵祭りで制作していたのは次のようなものである。

白川べりに現存する地蔵堂の横に、当時一本の老松が翠蓋を広げていた。喜三郎は、その松を唐崎の松に、白川を近江の湖水と見立て、湖水を水馬で乗り切った明智左馬之助が、湖畔の蔵王堂に見立てた地蔵堂の柱に愛馬大鹿毛をつなぎ、人馬愛別の情景を造り出したのであるが、左馬之助は等身大の張抜細工であった。張抜細工というのは、既に三都の人形師間でもやっていたもので、喜三郎のこの場合では、桐材で頭部、顔面を刻み、それをノコギリで二つに割り、ギヤマンの眼球を内面に嵌め込んだ上、引き割った桐材をもとどおりに合せて密着せしめ、その表面を髪で貼って顔料を塗り、頭髮、眉毛、睫毛をつけて面貌ができ上り、頭にかぶと、胸、胴は空洞の張子、それに鎧を着せ、鎧の

上には墨絵の竜の陣場織、腕と脚とは服装にかくれ、あらわになつてゐる手は桐材の丸刻みで、これにも顔料を施す。<sup>4</sup>

引用の冒頭の「白川べり」とは、現在の熊本市中央区迎町周辺のことである。白川に架かる長六橋の南は地蔵祭りの「造り物」がとくに盛んであつたようである。白川は現在でも熊本市の中心部を流れる一級河川である。長六橋も同じ場所に残つてゐる。その長六橋は一八五七年までは白川に架かる唯一の橋で、当時の主要な街道であつた日向往還、高森往還、薩摩街道、木山往還は迎町を通過点としてゐる。そんな交通の要所であつた迎町には熊本の商家が集中しており、同時に鍛冶屋や大工といった職人も多かつた。迎町は江戸・明治を通じて、交通の要所であり、熊本随一の職人の町であつた。<sup>5</sup>さらに、喜三郎が生まれた頃には江戸や大阪で流行した見世物が街道沿いに廻つてきて「からくり物」、「見立て細工」、「一式飾り」と言われる「造り物」を舞台上で見せ、やがて人形師がこの地で興行を繰り返すようになった。<sup>6</sup>実際に人々の往来が多かつた旧街道沿いには多様な「造り物」の興行が集中してゐたと思われる。

街道沿いには多様な文化が伝播する。西日本への「造り物」の伝播に関しては三田村佳子の「灯火の風流」<sup>7</sup>に端的で興味深い分析がある。三田村によれば「京都から東北に向かつては盆灯籠・花灯籠という灯籠風流が海路に沿つた湊町を核に伝播し、一方南西に向かつては野菜から日用品の一式形式のつくり物として陸路を介して展開した」。東北に向かつては灯籠風流とは能登の「キリコ」、津軽の「ネブタ」に代表され、これらは北前船など日本海航路の繁栄と共に伝わつていった。一方で京都から南西に向かつては、「京の上流社会でもてはやされてゐた盆灯籠」であり、その特徴は「台灯籠の上部に展開する華麗な紙細工」<sup>8</sup>であつた。この盆灯籠の紙細工が、農村では手に入りやすい野菜を使った細工になり、やがて矩形の台

も外れ、京都周縁で野菜を使って舟などの形をつくる「造り物」がみられるようになる。それらと、日用品や器物などを素材にした「一式飾り」などが、大阪の商人たちによって街道沿いに伝わつた。

それを裏付けるように、現在の熊本県内では多様な制作方法の「造り物」が「日向往還」「高森往還」といった旧街道沿いに多く残る。江戸末期に長六橋の北には「瀬戸物細工」、南には「張抜細工」が同時に見られたことから解るように、街道沿いに伝わつてきた造形文化が地区ごとに奉納「造り物」として定着してゐた。

職人の多い町で育ち、子供の頃から目立って器用であつた喜三郎は「からくり物」や「見立て細工」、「一式飾り」では満足せずに、手間のかかる「張抜細工」を採用し写実を極めていく。それがのちに「からくり物」など従来の見世物に飽きた江戸や大阪の聴衆を惹きつけ、生人形は見世物興行の花形となつていった。引用にある制作方法は、現存する数少ない喜三郎作品にも多くの共通点が残されている。

### 小泉八雲の見た地蔵祭りの「造り物」

喜三郎の地蔵祭りからはおよそ半世紀ほど経つが、小泉八雲は「生と死の断片」のなかで、明治末期の熊本の地蔵祭りの「造り物」について綴つてゐる。

わたくしは、その飾りものが、写実的によくできているのに、しばらく目をみはつてしまつたが、そばへ寄つてよくよく見てみると、なんのこと、トンボの胴体は、色紙でくるんだ松の枝、四枚の羽は四つの十能、ぐりぐり光つた頭は、小さな土瓶であることがわかつた。しかも全体が、あやしい影のさすようにおかれ、ろうそくの光で照らされてゐるのである。この怪しい影が、これもやはり、工夫のうちのひとつになつてゐるのであつた。

これなどは、まったく、美術的感覚のすばらしい実例である。しかもそれが、わずか八歳の貧しい家の子どもが、ひとりで骨折ってこしらえたものであるというのだから、じつに驚いてしまう。

引用中のトンボは極めて簡素なものであるが、再利用可能な十能や土瓶を使っており西日本に伝わってきた「見立て細工」の特徴を持っている。

この地蔵があつた場所は、現在の熊本市中心区坪井付近の通り沿いである。そこは、先に挙げた迎町から三キロほどしか離れていない。このような小規模の「見立て細工」の地蔵盆は、大分県大分市、別府市周辺から阿蘇山麓に続く旧豊後街道を中心にして南北に広く分布している。筆者が訪れた地蔵祭りのなかでは、塚脇地蔵講（大分県玖珠郡玖珠町塚脇）の様子は八雲の綴った地蔵祭りの特徴が残っている【図1】。



【図1】塚脇地蔵講

地蔵祭りは地蔵菩薩の縁日である二四日に行われてきた。現在は七月または八月の二三日、二四日、二五日あたりに行われている。また、地蔵が路傍で子供達を守るとされてきたことから、地蔵祭りは子供達を中心にして執り行われてきた。八雲が記すように「造り物」も子供たちが作っていたようだが、最近では少子化の影響で規模を小さくしたり、大人中心で制作されたりすることも多くなっている。

## 現在の熊本県内の「造り物」

熊本県内では、現在でも多くの地蔵祭りで「造り物」が制作されている。そのなかで地蔵祭りという名称を残しているのが、宇土市宇土の「うと地蔵祭り」、御船町御船本町通りの「地蔵祭り」、八代郡水川町宮原の「地蔵祭り」、上益城郡山都町馬見原の「火伏地蔵祭り」などである。また、熊本市南区城南町の「城南町夏祭り」、上益城郡益城町木山の「益城町みんなの夏祭り」、下益城郡美里町砥用の「やまびこ祭り」などは、地蔵祭りという名称は用いていないが、地蔵菩薩の縁日を中心にして開催されている。宇土市小川町の「小川阿蘇神社夏祭り」は戦後に始まった夏祭りであるが、ここでも「造り物」が見られる。上益城郡山都町浜町の「八朔祭」は規模の大きい「大造り物」が制作される。阿蘇郡では高森町の「高森風鎮祭」や南阿蘇村吉田新町の「鎮火祭」では「造り物」の他に「俄（にわか）」と呼ばれる民俗芸能が演じられる。<sup>10</sup> 一方で、山鹿市鹿本の「かもと招魂祭」のように、以前は作られていたが祭りの内容が変更されて、現在では制作されていない祭りもある。熊本県内では「つくりもの」と共に「つくりもん」と呼ばれていることも多く、その殆どで出来栄を競う競技、コンクールになっている。

この三年間はすべての祭礼や行事が新型コロナウイルスの影響を受けている。筆者は二〇一八年の「八朔祭」、二〇一九年には「うと地蔵祭り」、「火伏地蔵祭り」、大分県の「塚脇地蔵講」、「八朔祭」の視察を行った。その際に、周辺地域にはない規模で制作されている八朔祭「大造り物」を中心にした研究を進めようとしたが、二〇二〇年、二〇二一年は、八朔祭を含むほぼ全ての祭礼が中止となった。二〇二二年には再開した祭礼も多かったが、準備期間中に第七波と呼ばれる急激な感染の再拡大が重なり、人が集まって準備をする「造り物」を中止せざるを得ないケースもあった。「うと地蔵祭り」や「火

伏地藏祭り」は実施されたものの「造り物」は見送られた。一方で「八朔祭」や「高森風鎮祭」などは一部の規模縮小はあったものの以前に近い様子で「造り物」が披露された。二〇二二年の対応は様々であった。次章以降は、令和四年度に実地調査を行った山都町の八朔祭について詳しく述べる。

### 山都町・八朔祭と起源

八朔祭は熊本県山都町浜町商店街一帯で九月の第一土曜日、日曜日にいわれ、「大造り物」と呼ばれる巨大な造形物が制作される。山都町は平成一七年に矢部町、蘇陽町、清和村が合併してできた町である。八朔祭は旧矢部町で行われることから、矢部の八朔祭とも呼ばれることが多い。『矢部町史』<sup>11</sup>によると、安土桃山時代にこの地方に伝わっていた豊年地踊りや笹踊りの人たちが、農家の日々の労苦を慰め感謝する祭りが八朔祭の起源と記されており、その始まりは一七五七（宝暦八）年となっている。

矢部ではその前年の一七八六（宝暦七）年に細川藩の命によって八朔の日に豊穰祈願祭を行なっている。『熊本の祭り』によると、この豊穰祈願祭は「矢部郷の不作を心配した細川藩が、矢部手永の庄屋に命じて豊年祈願祭を行った」とされている。<sup>12</sup>しかし、そう単純でもなさそうである。岩本税の「近世の祭礼・諸興行と民衆―上益城郡矢部手永を中心として―」によれば、浜町を中心とする矢部は藩庁のある熊本からは五〇キロ以上離れている山間部にありながら、豊後や日向と隣接している要所でもあった。よって浜町には裕福な商家や士族が多く、あらゆる興行も集中していたので、矢部の人々は熊本や御船には出ずに浜町に集まった。その状況から浜町を中心にして矢部郷民としての連帯感が強く、それ故に一揆の発生率が他地域よりも高かった。<sup>13</sup>さらに矢部地域の歴史情報を公開して

いる「山都町郷土史伝承会」の近年の分析では、当時の矢部は藩の検地による増税に反対をしていた地域であったので、いわば不満解消のために藩が祭りを命じたのではないかと、当時の歴史的状況を鑑みながら考察している。<sup>14</sup>

藩の命によって豊作祈願祭を行った一七八六（宝暦七）年は豊作になったと言われている。それで翌年は地元で祭りを執り行う流れになった。それが現在まで続く八朔祭の始まりであり、現在は一七五七（宝暦八）年が八朔祭の開始年となっている。岩本税が古文書を元に作成した年表に「八月祭礼地踊り許サル（宝暦八）」という記述が出てくる。<sup>15</sup>つまり、地元で執り行うようになった豊作祈願祭の初年度に古くからこの地に根付いていた地踊りを合流させている。これは先の矢部郷民としての連帯感と独自性を重んじる気質の表れであり、八朔祭を生粋の矢部の行事として立ち上げようとした矢部の人々の強い想いの表れであろう。

### 八朔祭と「造り物」

祭りの始まりが明らかになっている一方、いつ、どのように「造り物」が見られるようになったのかは、諸説混在している。昭和四四年九月七日の熊本日日新聞には「矢部八朔の造り物は、地蔵引きから発展したものと云われる。地蔵引きとは、各地にいまなお残る地藏祭の一種で、お地藏様を荷車に乗せ町や村のつじを練り歩いたものである。しかしいつごろから地藏の代わりに、造り物を作った引き回したか、はっきりしない。」<sup>16</sup>と記されている。これを直接的に裏付ける文献は今年度の調査では見当たらなかった。しかし、浜町が日向往還の主要都市であったことを考えれば「造り物」が地藏の縁日に奉納されていた可能性は十分にある。地理的にも近く、同じ様に日向往還の主要都市であった馬見原「火伏地藏祭り」では、

神輿の上に地蔵を乗せて練り歩く「裸みこし」が現在でも行われている。これはまさに地蔵引きである。馬見原では神輿の上に「造り物」も乗せて練り歩く。その馬見原の「造り物」は、少なくとも一八五八（安政五）年には現在と同じ様な趣向で作られていた。<sup>17</sup>馬見原と同じような「造り物」が矢部でも見られていたことは推測できる。

一方で、山都町下市の下市連合組発行のカタログ『造り物1948-2016』<sup>18</sup>の冒頭には「商店の人たちは日頃からお世話になってる農家の人たちをもてなそうと、酒肴を用意するとともに店先に造り物を飾りました。（中略）造り物も当初は、動かさない据え造りで、それほど大きくなかったものが、商店街で互いに競い合ううちに大きくなり、さらに（中略）大八車に乗せて町内を回るようになった」と記載されている。前述の地蔵引きの説とは異なるが、下市連合組は「大造り物」を代表する団体で、この説が地元にも広く伝わってきたと思われる。

繰り返しになるが、近世の浜町を中心とする矢部手永は藩に一揆を警戒されるような勢力のある土地柄である。藩からみれば集団行事が最も注意すべきことである。土地に根付いていた地踊りも「地踊差止め今年迄相止（寛政一一）」という記載が示すように規制されていた。岩本の年表を参照してみると締め付けが強かった「地踊り」よりも「雨乞踊」「雨踊」が多くなっている。収穫の為の雨乞いは、年貢を納めさせている藩にとっても禁止する理由がない。雨乞踊は干ばつ時の祈祷以上の拡がりをもって、地域の祭りとして公然と実施されていた。そして数多い「雨乞踊」の記述のいくつかに「造り物」が登場する。「雨乞踊作りモノ出ス（天明五）」や「雨踊作モノ（寛政一〇）」、「浜町組雨踊作モノ（寛政六）」などである。さらに一七九八（寛政一〇）年の雨乞踊は、矢部の村々が三カ所を集まって盛大に行われている。その雨乞踊に複数の「造り物」が登場していた可能性は高い。また一七九九（寛政一一）年の雨乞踊りは矢部全

体で行われ浜町から戸数の極端に少ない山間僻地にまで出張して行われていた。<sup>19</sup>このとき「造り物」が雨乞踊と共に移動していたのならば、据え造りの「造り物」が何らかの方法で運ばれていた可能性がある。今後の調査で明らかにすべき点はまだ残されている。

### 「大造り物」の素材について

八朔祭の「大造り物」が他の地域の「造り物」と比べて最も異なるのは、自生している山野の植物を表面の素材に使う点である。山都町八朔祭実行委員会が発行している観光客向けのパンフレット<sup>20</sup>には「大造り物心得」が記載されている。その其の一には「山野に自生する植物を材料に巨大な造り物」とある。植物の代表的なものは、杉の葉、シュロの皮、どんぐり、カスラ、ホオズキ、ススキ、萩の穂、マツカサ、竹などである。これらの材料は近隣の山野で調達され、制作小屋で取り付けやすいように加工される【図2】。よく聞かれたのは、温暖化の影響で植物を調達する時期が変わり、制作時期に確保するのが難しい植物が増えたということである。とくにススキの調達が難しくなってきたいて、近年では代わりにパンパステラスを調達するなどの工夫が必要になっている【図3】。

戦後の「大造り物」を新聞やカタログの写真で見ると、制作されるのは動物や怪獣、伝記に基づいた人物などが多い。特に馬猪、ライオン、虎、麒麟などは繰り返し登場している。毛なみのある動物を表現するにはシュロの皮やススキの穂は極めて相性が良いように見える。近年では



【図2】下市連合組

赤色系の鬼灯が加わるなど使われる植物の種類も増え、より形体が複雑なミュージシャンやアニメキャラクター、ゆるキャラなどが登場する機会も増えている。

「大造り物」に植物を使うようになった経緯は明らかになっていない。制作の現場では「自然との一体感や感謝の気持ちの表れが植物を使った造り物になっていく」という意見が聞かれた。矢部は深い森林に抱かれた山深い地域である。素材が手に入りやすいという物理的な条件だけではなく、自然の恵みに対する感謝や畏怖の念が深く根付いた自然信仰が根底にあることは間違いないだろう。

### 「大造り物」の制作について

現在、「大造り物」の大きさは高さ五メートル(台車込み)、長さ五メートル、幅三メートル以内と決められている。これほどの大規模なものなので作る場所の確保に以前は苦労したようだ。現在では、鉄骨造りの制作小屋が整備されている。この制作小屋で二カ月ほどかけて「大造り物」は制作される【図4】。

制作するのは同じ地域に住む人々で構成された連合組である。「大造り物」は昭和三八年のように一四基つ



【図4】 下市連合組



【図3】 下市連合組

くられることもあった。平成元年に六基になっていたが、戦後は毎年、概ね一〇基前後となっている。近年は八連合組と地元の矢部高校、矢部小学校、山都町役場の一一基である。令和四年は八連合組と地元の矢部高校、山都町役場の一〇基が制作された。連合組は決して大きい単位ではなく、制作責任者のもと一〇人前後の作り手が入れ替わりで制作している。一般の人々が時間をやり繰りして集まって制作するというスタイルで、制作のすべてを連合組内で行う。規模や精巧な作り込みから専門従事者がいても不思議ではないが、専門従事者はいない。

また「大造り物」の制作は基本的に非公開で進められて、各団体がどのようなものを作るのかは秘密にされる。小屋の四方も壁やシートで隠されている。実際には制作の集中する八月に商店街を歩くとシルエットが透けて見えたりするが、各連合組も互いに制作物の話題を公然とすることは避けている。秘密裏に作られていることを証明するかのように、作られる対象が重なることも多いようである。実際にエリマキトカゲが大ブームになった昭和五九年には、作られた八基のうち三基がエリマキトカゲであった。<sup>21</sup>

### 「大造り物」のテーマについて

「大造り物」は、対象を大きく巧く表現するだけではなく、そこに世相を反映したメッセージを加えることも条件付けられている。「大造り物心得」の其二は「世相を風刺し、政治を皮肉り、あるいは庶民の願望などを上品な洒落を交えた表現を行う」である。

戦後の熊本日日新聞の記事をもとにして過去に受賞した「大造り物」のテーマを見てみると、世相を反映したものが殆どで、それらは政治や社会問題に向けられているものが多い。昭和二六年は「引揚促進」、一講和の調印」と終戦後の話題が中心となっている。<sup>22</sup> 昭和

四二年にはブームに乗って怪獣が多く登場しているが、沖縄返還問題やベトナム戦争にも焦点があてられている。<sup>23</sup> 昭和四四年はアポロ一号の月面着陸があった年なので「宇宙へ飛び立つ若鷲」「月より追われたウサギ」などが登場した。<sup>24</sup> 昭和四五年は公害が主題となり「公害をのがれて矢部町へ」、「クマなく公害をなくしましょう」などのタイトルがつけられている。<sup>25</sup> 昭和五一年はロッキード事件による金権政治の糾弾が多く「金権・汚職今年で断つ」や「糾弾せよ金権政治」など、直接的なタイトルが目立っている。<sup>26</sup> 昭和五六年は町内の議長選贈賄事件に関わるテーマに集中する。「ついに来た百条（獣）の王者 矢部を喰う」「荒れる議会獣」、「明るいまちづくりに獅子奮迅」など、中央の政治問題ではなく、近い問題でも臆することなく扱う。<sup>27</sup> 今年（2023）はロシアのウクライナ侵攻、新型コロナウイルス関連を用いながらも、平和、平穩に繋げようとするテーマが多かった。

近世の矢部手永を研究した先述の論文のなかで岩本は「民衆は祭礼行事、諸興行に対して主体的に積極的に参加し自演することによって町・村支配統制の圧迫からのがれようとしたし、その為に手永単位に連帯結集して、解放の機会と場を求めたことは否定出来ない」<sup>28</sup>と論文のまとめで述べている。このことが形を変えながらも、世相を風刺するテーマ設定として、現代に生きているということとは、地域性と祭礼の継承を考える上で大変興味深い。

## 「大造り物」の審査について

優れた「大造り物」には賞が与えられる。商店街の引き回しが終わると、審査会場に「大造り物」を運び、各団体は詳細な説明をする。それが終わると審査員による採点が始まる。採点基準は構想一五点、材料一五点、技術七〇点、お囃子一〇点の合計一一〇点と決

められている。<sup>29</sup> すべての「大造り物」の採点が終わると、まもなく各賞が観衆の前で発表される。同じ地域で行われる恒例の行事といえども、審査は厳格に行われる。近年、圧倒的な確率で金賞を獲得しているのは下市連合組である。近年の結果では、下市連合組は平成一四年からなんと一一年連続で金賞を獲得している。それ以降も毎年のように金賞を獲得しており、金賞を逃したのは平成二五年、二六年、三〇年の三年だけである。この三年に金賞を獲得したのは浦川連合組である。三年ぶりの開催となった令和四年も下市連合組が金賞を獲得している。つまり、平成一四年以降、金賞を獲得できなかったのはたった二つの連合組である。<sup>30</sup> この結果を見ても各地域のバランスをみた採点などが一切行われていないことがわかる。

三年間見ていると、それぞれの連合組に独自性があることがわかってくる。下市連合組の「大造り物」は多様な要素をふんだんに盛り込み、動きのある立体を作りながらも、全体として一つの世界観にまとめることに長けている。他にも動物のボリューム感のある造形に長けている連合組、アニメキャラクターを的確に作る連合組など、それぞれに特色のある創意工夫を行っている。

## 実際の制作現場の視察

「大造り物」の実際の制作について、令和四年に下市連合組と新町中連合組のご理解をいただいて取材を行った。この章では筆者がその際に撮影した写真を掲載する。植物の採取現場は今年度、取材できなかつたが、制作に欠かせない重要な作業であり、小屋での制作と同時併行で行っている。「大造り物」の制作は、八朔祭の二か月ほど前に小屋入りして、残された作品の解体から始まる【図5】。

まずは、新しい「大造り物」の構想を練り、テーマや形を決めている。決め方は連合組によって様々で、アイデアを出し合って合議で

決める連合組もあれば、責任者が率先して決める連合組もある。何を制作するかが決定したら、土台を組んで、骨組みを作るところから立体の制作は始まる【図6】。骨組みの上には細かく垂木を入れて造形の骨格が出来上がる。次に細く割いた竹材を全体にまわし大まかな曲面を造りあげる【図7】。



【図5】新町中連合組



【図6】新町中連合組



【図7】新町中連合組



【図8】下市連合組



【図10】下市連合組



【図9】下市連合組



【図11】下市連合組

さらに竹材の上には金網が巻かれ、【図8】その上から薄いベニヤ板を張り込み、ひねりのある複雑な三次曲面を作り上げる【図9】。作り出す形に応じて、金網を巧みに加工しながら立体の原型を作り出す【図10】。また植物を芯にして、金網で形を固定するなど、ある材料で種々の工夫を凝らして、複雑な形を制作する【図11】。

今回の制作を見学して驚いたのは薄いベニヤ板の扱いです。現代彫刻でもたびたび見られる手法がここでも使われていた。幅の狭い短冊状のベニヤ板を入れることで、それぞれに作られていた腕や

足などの部分が全体として骨格のある形にまとまる。さらに植物を取り付ける前に、板を貼ることで全体の量感が見やすくなる。平成二〇年ごろからの金賞を受賞している「大造り物」には、造形に大きな動きとひねりが加わっているように思われ、造形の難易度が一段上がっているように見える。より迫真の造形を求める過程で、様々な造形技術を取り入れて更新され続けていることは興味深い。

最後にさまざまな植物を貼り付けて、完成となるが、これにも細かい工夫が見える。鳳凰を制作している新町中連合組は、鳥の毛並



【図14】 下市連合組



【図15】 下市連合組

また、動きの大きいエルビス・プレスリーを制作していた下市連合組は、跳ね上がった衣類の裏側まで植物を貼り込むなど細部へのこだわりに加えて、激しい動きや空間を最大限に活かすアプローチが強く見られた【図14】【図15】。



【図12】 新町中連合組



【図13】 新町中連合組

みや鶏冠の瑞々しい質感までを追求していた【図12】。嘴や爪などは枯れた材木を使用するなど、繊細な質感へのこだわりが強く感じられた【図13】。



【図17】 新町中連合組



【図16】 下市連合組

制作現場の取材を行った下市町連合組は「エルヴィス世界に愛を届けたい」と題して、コロナ禍や戦争で苦しむ人々への愛を訴え、新町中連合組は「乱世を鎮める天空の使者ー一日も早くホーッ（鳳凰）とする世の中にー」というタイトルで、平穩への想いを込めた。三年振りの開催となった令和四年は下市連合組が金賞を受賞、新町中連合組が銀賞を受賞した【図16】【図17】。

## おわりに

筆者は、日本近代彫刻の黎明期を考察するなかで、近代に見落とされた明治以前の造形に着目してきた。明治に先立つ江戸時代は彫刻の衰退期と言われているが、これは仏像と都市部に向けられた見解である。地方では地域に根付いた立体造形が作り続けられていた。熊本の「造り物」文化を調査することになって、改めて創意工夫で腕を磨き合ってきた、日本固有の造形文化の発展過程が読み取れた。

また、彫刻の実作者である筆者は「大造り物」の制作の難易度の高さに関心をもった。それらが一般の人々によって作られている事を知り、実際の現場を見たいと思った。現場では全員が楽しみなが器用に手を動かしていた。現在、制作の中心にいるのは子供の頃から憑かれるように「造り物」を作ってきた年代の人たちである。当然、少子高齢化、過疎化で今後の継承についての見通しは悪いとの声はある。しかし、今現在が歴史的に最も成熟した「大造り物」になっているという、制作者の言葉が印象に残っている。

八朔祭には各地から大勢の人が訪れる。少なくとも西日本の「造り物」がみられる祭礼のなかでの集客力は随一である。一方で、近隣の馬見原の火伏地藏祭りや高森風鎮祭に比べて先行する研究が少ないように思われた。馬見原や高森の「造り物」は大阪や山陰地方で類似するものが現存する。系統や変遷などを研究する手がかりは比較的多い。また、聞き取りをするなかで、「大造り物」は神社に奉納する種のものではなく、人が人を労ったり、楽しませたりするために作られている、という言葉が聞かれた。これは八朔祭の起源とも一致する。一般的に奉納する事物は変化を望まないし、記録に残りやすい。逆に人を楽しませることが目的ならば大切なのは世相や現場である。昭和以前にそれらを正確に記録するのは難しいように

思われる。そのことが近世研究の立場から見れば手がかりが少ない印象になるのかもしれない。ただ、人が人を楽しませるという「大造り物」の起源と本質が、他にない独自の「造り物」を作り上げていることも確かである。

本稿は、制作の現場での聞き取りや、発行されているパンフレット、カタログ類、新聞、地域の歴史研究を調査することから始めた。基本的な情報としての祭りの起源や由来を調べるうちに、山々に囲まれつつも独自の営みを続けていた矢部地域に固有の気質というのが、現在にも祭礼空間や現在の「大造り物」に浮き出ていることが体感として理解できた。このことは地域に根差した造形について考える良い指針になった。筆者が制作する立体作品やプロジェクトにも還元していきたい。

今回の実地調査には多くの方々にご協力いただきました。とくに下市連合組の橋本浩彰様、新町中連合組の下田隆一様、岸本竜彦様には制作中にも関わらず、何度も取材に応じていただきました。また両連合組の方々には様々なご協力をいただきました。山都町商工会藤原千春様には調査の窓口としてご尽力いただき、山都町観光協会の中嶋あゆみ様には写真の提供をしていただきました。皆様には厚く御礼申し上げます。

本稿は科研費基盤研究(C)「中空構造を持つ立体造形物の基礎と彫刻表現の実践」(研究代表者・芝山昌也)に基づく研究である。

(しばやま・まさや 彫刻専攻/彫刻)

(二〇二二年一月八日 受理)

- 15 前掲「近世の祭礼・諸興行と民衆」表2を参照。
- 14 山都町郷土史伝承会ホームページ「八朔祭の由来について紹介  
します。」を参照。
- 13 岩本税『近世熊本の農村と社会』（岩本税論文集刊行会、二〇一  
四年）、一八五頁～二二一頁の「近世の祭礼・諸興行と民衆」を  
参照。
- 12 牛島盛光編著・白石巖撮影『熊本の祭り―熊本の風土とこころ  
―』（熊本日日新聞社、一九七三年）、一三八頁。
- 11 矢部町誌編さん委員会『矢部町史』（一九八三年）
- 10 熊本県内「造り物」の見られる祭礼については、福原敏男・西岡  
陽子・渡辺典子『一式造り物の民俗行事―創る・飾る・見せる  
―』（岩田書院、二〇一六）二四一頁～二四四頁の「現行一式造  
り物行事一覧」参照したうえで、筆者による現況調査を加えて  
記述している。
- 9 小泉八雲『東の国から・心』（恒文社、一九七五）、一四一頁～一  
四二頁。
- 8 前掲「灯火の風流」一四三頁。
- 7 三田村佳子『灯火の風流』、『山・鉾・屋台の祭り研究事典』（思  
文閣出版、二〇二一）一三八頁～一四九頁。
- 6 前掲『名匠 松本喜三郎』、一九頁～三一頁。
- 5 『歴史回廊都市くまもと』（熊本市、一九八九年）五二頁を参照。
- 4 前掲『名匠 松本喜三郎』、三〇頁。
- 3 大木透『名匠 松本喜三郎』（CAMK PRESS 熊本現代美術館、  
二〇〇四）。昭文堂書店から出版された絶版書籍の復刻版。
- 2 安本亀八（一八二六年～一九〇〇年）熊本出身の人形師。
- 1 芝山昌也「近代日本彫刻考（一）『光雲懐古談』をめぐる」、  
『金沢美術工芸大学紀要六三号』（金沢美術工芸大学、二〇一九）。
- 16 一九六九年九月七日 熊本日日新聞第4面「矢部の造り物 こ  
うしてできる」を参照。
- 17 蘇陽町『蘇陽町史 通史編』（一九九六年）三三三頁。
- 18 下市連合組『造り物1948-2016』（二〇一六年）。
- 19 雨乞い踊りの記録についてはすべて前掲の「近世の祭礼・諸興行  
と民衆」表2を参照している。表2は著者が、古文書『郷党歴代  
拾穂記』に記載されている神事・祭礼・諸興行を月日順に配列し  
た表である。『郷党歴代拾穂記』の著者は男成大和守寿（一七二  
六～一八〇五）が会所記録や旧記をまとめたものである。
- 20 大造り物パンフレット作成委員会が二〇二〇年一月三十一日に発  
行した四つ折りパンフレット。
- 21 昭和五九年九月三日 熊本日日新聞第一五面。
- 22 昭和二六年九月四日 熊本日日新聞第四面。
- 23 昭和四二年九月三日 熊本日日新聞第五面。
- 24 昭和四四年九月八日 熊本日日新聞第四面。
- 25 昭和四五年九月七日 熊本日日新聞第五面。
- 26 昭和五一年九月六日 熊本日日新聞第六面。
- 27 昭和五六年九月七日 熊本日日新聞第一三三面。
- 28 前掲「近世の祭礼・諸興行と民衆」二〇八頁を参照。
- 29 前掲の四つ折りパンフレットを参照した。
- 30 受賞に関しては該当年の熊本日日新聞の記事を参照している。

図版

- 【図1】二〇一九年 筆者撮影
- 【図2】～【図4】二〇二二年 筆者撮影
- 【図5】二〇二二年 中嶋あゆみ氏撮影
- 【図6】～【図17】二〇二二年 筆者撮影

